

南京木屑

日中友好と紫金草物語

菊崎 威

大学図書館の園地の端に、大根の花に似た、しかし薄紫の可憐な花の群落があり、風に揺れている。新しく整備された園地で昨年までは見られなかった花だ。

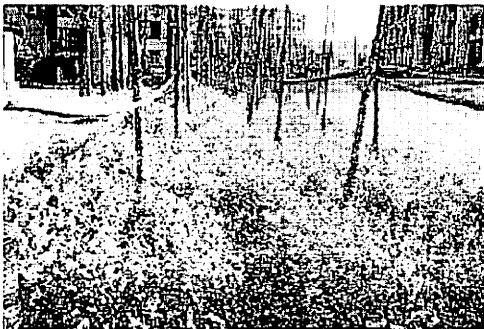
紫金草。学名はオオアラセイトウ。中国名は二月蘭、諸葛菜といい、日本では花ダイコンとも呼ばれているらしい。この時期いたるところで見られる野の花である。

この花の名を知ったのは大門高子さんの絵本「むらさき花だいこん」がきっかけであり、南京に来る前、母の亡くなった年かその翌年かははっきりしないが、鉄道沿線に咲いていると知り、糸魚川への行き帰りに信越線沿線に目をこらしたことを覚えていた。

大門高子作詞、大西進作曲による組曲「紫金草物語」

のなかに平和の花として歌われ、南京ともゆかりが深いと知り、いつかこの花を見、その歌を聞きたいと思っていた。

紫金草は、石岡市出身の薬学者で日中戦争当時陸軍衛生材料廠の廠長だった山口誠太郎という方が南京から日本へもちかえり育てた花だという。戦禍がれきの街と化した南京



市内の様子に心を痛めていた山口さんが、紫金山のふもとに咲くこの花に心を慰められたであろうことは想像に難くない。種を数十粒もちかえり、紫金草と名付け自宅の庭に植えて、種が実ると、それを空き地に蒔いたり、土団子にこね、列車の窓から蒔いたりしたそうだった。戦時中から始めたただひとりの平和運動だ。

誠太郎さんは一九六六年に七九歳で亡くなられるが、ご子息の山口裕さんが引き継がれ、その後平和への思いをもつ多くの賛同者も現れ、大きな運動となり、紫金草は全国各地に広がっていった。一方、歌声の運動も広がりを見せ、各地にあったサークルが二〇〇一年には全国組織「紫金草合唱団」として成立する。そして日中平和友好を願って毎年中国公演をしている。

歌を歌い、花を広めるこの運動は二〇〇七年には大きな成果を生む。

南京虐殺記念館は江東門集団虐殺現場と「万人抗」遺跡に一九八五年に建てられたものだが、過去二回の増改築を経て二〇〇七年一月二三日に新館がオープンする。敷地内西側約三分の一のスペースが平和公園になっている。シンボルは高さ三〇メートルの母子像である。この公園の南側一帯に雪松などの木々が植え

られているが、これは一九八六年以来、日中友好協会をはじめとした民主団体の植樹によるもので、この一画、平和の像のちょうど南に「紫金草花園」と名付けられた場所がある。おさげのかわいらしい少女像が立っている。山口裕さんを代表とする「日中平和の花園建設の会」による一千万円募金の銘がある。二〇〇七年八月に山口さんたちは、ここに日本から持ってきた紫金草の種を蒔いた。紫金草の里帰りだが、今みごとに咲いている。

三月二六日、紫金草合唱団の第七次公演が南京理工大学であった。学生にも聞かせたいと思い、声をかけたところ一七人も参加してくれた。理工大学には和平園という紫金草の花園がある。正門をはいって間もなく右手に薄紫のじゅうたんが広がった。みんな一緒に歓声を上げる。なんと美しい花園であることか。二区画に分かれた広大な群落だ。思わず我を忘れて花園に踏み入ってしまった。

この花園があるためか、紫金草合唱団の公演はいつも理工で行われている。

合唱に先立って、代表の方の挨拶があった。地震に

際して、中国から多大な支援を受けていることへの感謝、当初八〇名の参加予定だったが、地震の影響によって六〇名の参加になったこと、親族に行方不明者がいる団員もいることなどを語られた。一時、公演中止も考えられたようだが、「戦争も地震も人の生命を奪い、人を不幸にする点では同じ。生命を大切にし、平和を守るためにも公演しよう」と実施を決意されたらしい。

二胡の前奏で始まる全二曲の「紫金草物語」だ。間に独唱や中国語の朗誦がはいる。終曲は「平和の花紫金草」で、その最後は「和平的花 紫金草」と中国語で歌う。私と同世代かあるいはそれ以上の方もおられるようだ。

あの戦争で心に深い傷を受け、そして深い闇を抱きながら生きてきた人は多いだろう。その痛みが紫金草の優しさで癒された人も多かったに違いない。歌声を聴きながら、戦争の愚かさ痛ましさを平和の尊さを今さらながらかみしめる。あの花園を見てきたせいもあるのか、やたらに涙があふれる。

理工大学生の踊りや演奏などをほさみ、最後は友情出演した江蘇省民盟鐘声合唱団との「平和の花 紫金草」の中国語バージョンの大合唱で幕を閉じる。

一緒にいった学生が「感動した」「すばらしかった」「収穫の多い充実した一日だった」といつてくれた。なかには涙を流した学生もいた。帰路、「先生、歌えませうか。教えてください。一緒に歌いましょう」と心を共にした。誘った甲斐があった。

翌日、虐殺記念館でも合唱を披露すると聞き出かける。この日はどういう日かわからないが、記念館入口はすでに入場者の列でうまっていた。

紫金草花園に相對し、平和の像の下に勢ぞろいした合唱団の方たちは、昨日同様の挨拶をした後、二胡を伴奏に五曲歌った。何ごとかと足を止め、そして聞きいつていく人々がいる。館長の挨拶もあり、地元南京テレビの取材もはいつた。最後に指揮者の聴衆への呼びかけで「和平的花紫金草」とみんなで繰り返し歌った。

帰ろうとしたら、平和の像の向こう側で合唱が始まった。行ってみると、地元の合唱愛好者の方たちだろうか、交歓合唱をしている。それが、「さくらさくら」の大合唱になり、そして「北国の春」になった。例年のことのように、懐かしそうに握手を交わしている人も

いる。

館の職員が小柄なご老人と入れ替わり立ち替わり記念撮影をしている。近くにいた団員の方に聞くと山口さんだという。これは思わぬよき出会いとばかりお話を伺いする。山口裕さん、現在八七歳、石岡市日中友好協会理事、日中平和の花園建設の会会長で、合唱団とは一〇年の付き合いで毎年ご一緒に南京に来られる。お元気ですねというと、「父は紫金草は死禁草だ



とよく言っていましたから」と笑われた。

「記念館の紫金草コーナーに父の絶筆があるんです。ベッドに横になったまま、差し出した紙に書いたものですが・・・、紫金草頼むと書いてあるんですよ。だから、なかなか死ぬませんよ。」

長いあいだ平和運

動を続けてこられたからか、どこまでも柔和な温かみのあるお顔であった。

後日談

今年春が早く過ぎ、五月に入ると暑い日が続いた。中旬には大学の紫金草が結実し、まもなくこぼれはじめた。この平和の花をわが家にも咲かせようと思い、種集めをした。友人からも依頼があった。ごくごく小粒の種で、またすぐにはじけ飛んでしまうので、手のひらほど集めるにもひと苦労だ。

六月のある日、合唱を聞きに行った学生のひとりが両手にあふれるほどの種を持って来てくれた。私が集めているのを聞き知ったことだった。友人と何時間もかかったらしい。彼らの平和への思いのひとつだ。

長岡で、見附・小千谷・六日町・柏崎・糸魚川・新潟そして東京・千葉で、来春小さな平和の花園が生まれることを楽しみにしている。

(きくさき たけし・南京滞在)